【ポスター発表】

児童養護施設退所者の大学進学実現の経過に関する検討

－高等学校期を中心に－

○　中部学院大学短期大学部　　平松喜代江（6444）

キーワード：児童養護施設、大学進学、高等学校期

１．研 究 目 的

全国高等学校卒業者の大学への進学率は 74.1%、就職率は 18.0%、その他は 7.8%であった。他方、児童養護施設における進学率は 24.0%、就職率は 70.4%、その他は 5.6%であった(厚生労働省,2017)。これらの結果から、特に注目されるのは、児童養護施設における大学等進学率が 24.0%と著しく低いことである。全国高等学校卒業者の進学率 74.1%の 3 分の１に過ぎない。苅谷(2001)は、本人の努力以前の段階で意欲の格差が生じていることを指摘している。さらに、大学等への進学の実現性の低さから希望も生まれないという負のスパイラルも想定できるとしている。永野(2012)は、児童養護施設における大学等進学率が低いことの理由のひとつとして、「大学等進学を希望する」という希望をもてるかどうかが影響していることを挙げている。そこで、本研究では、児童養護施設入所者の大学等への進学率が低い理由を明らかにし、さらに大学等進学を希望する入所者が進学を実現できるようにするためにどのような支援が必要であるかについて検討することにした。

２．研究の視点および方法

調査協力者　大学に進学した児童養護施設退所者 7 名を調査協力者とした。

調査時期　調査は 2015 年 8 月から 2016 年 9 月の間に実施した。

調査手順　調査協力者 7 名に対して面接調査を実施した。面接調査は、半構造化質問の形式をとり約 1 時間行った。面接は協力者の了承を得て IC レコーダーに録音した。

調査内容　面接調査の内容は、大学進学に至るまでの生活において「家族の状況」「生活状況」「進路状況」「経済状況」「社会資源」「本人の心情」について自由に話してもらった。

録音記録の処理　録音された 7 名の調査協力者の録音記録は再生して逐語録を作成した。作成された逐語録から「小学校期」「中学校期」「高等学校期」の時期における進路希望の有無とその契機について整理した。

３．倫 理 的 配 慮

本研究に関わる調査は、日本社会福祉学会研究倫理指針を厳守した。調査に際しては事前に書面にて調査の趣旨および匿名性とプライバシー保護を遵守すること、研究目的以外で調査結果を利用しないことを説明し承諾を得た。また、調査結果においては検討・分析に際して個人が特定できないように配慮した。本研究は中部学院大学倫理審査委員会（受付番号：E16-0018）の承認を得た。

４．研 究 結 果

全 7 事例において、各時期での進路希望の有無やその契機がどのような経過で大学進学希望に至ったかについてまとめたが、今回は高等学校期における進路希望の有無とその契機の結果について示した。高等学校期には 7 事例のすべてが大学進学の希望をもっていた。そして、その契機は、施設職員の存在としたのが 4 事例、高等学校の担任教師の存在としたのが 2 事例、ボランティア体験が 1 事例であった。施設職員の存在とした事例には、「施設職員や教師になるには大学へ進学して資格取得する必要がある」などの助言が施設職員から与えられていた。高等学校の担任教師の存在としたうちの 1 事例では、高等学校 3 年生次の担任教師が進路指導の際に本人の成績や性格を考慮したうえで大学進学を強く勧めてくれたことが契機となって大学進学を希望するようになった。この事例は、 大学進学を全く考えていなかったが、担任教師から大学で学べる内容やその魅力、大学卒業後の就職の話などの将来の見通しに関する情報を提供された。そして、「勉強を重ねる度に自分の内面も充実していくのを感じた」、「今まで夢や目標を全くもてなかった生活が一変した」と述べ、進路のイメージが明確にできたことにより大学進学の希望をもてるようになったことがわかった。また、ボランティア体験が契機になった 1 事例は、今までの生活のなかで「人から感謝される体験や自分のことを覚えていてくれる人がいるという体験がなかった」と述べており、この体験をきっかけに将来の目標を明確にして大学進学希望へとつなげた。このことは、新しい体験を通して目標をもてるまでに変化したことがわかった。

５．考　察

各時期の進路希望の有無については、小学校期、中学校期、高等学校期のいずれにも進路希望があったのは 4 事例であった。小学校期および中学校期には進路希望がなく、高等学校期に希望をもったのは 2 事例であった。小学校期には進路希望があったが、中学校期に希望を失い、高等学校期に再び希望をもったのは 1 事例であった。この事例は、小学校期には、絵を描くことが好きで将来は漫画家になりたいと希望していた。しかし、中学校期には「施設のみんなは卒業して就職していたから、自分も就職するだろう」と思うようになり将来の目標を喪失していった。そして、高等学校期に施設で新しく替わった担当職員と児童相談所の担当職員との出会いによって、その職業に憧れるようになり、再び進路への希望をもった。このように、希望を失い挫折感に苛まれても、適切な時期に必要な支援を行うことで再び希望をもてることがわかった。そして、その支援者について、永野(2012)が指摘する「育ちのなかでの目標」には身近な大人の存在の影響が大きいといえた。本研究では、高等学校期における支援について言及したが、今後は各時期における支援の相違点についても検討する予定である。